九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

尊経閣文庫蔵『論語講義筆記』の文体 : 逆接の接続詞サレドモとアレドモを中心に

松尾, 弘徳
日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/8970

出版情報：文獻探究. 42, pp.16-25, 2004-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

尊経閣文庫蔵『論語講義筆記』の文体

－逆接の接続詞サレドモとアレドモを中心に－

松尾　弘徳

本稿の目的

抄物文体の有する問題点については、これまでも論じられてきたところである。本稿は、抄物に特徴的な接続詞とされるアレドモのあらわれ方をもとに、尊経閣文庫蔵『論語講義筆記』の文体に関して考察を加えるものである。

１.『論語講義筆記』概要

前田育徳会尊経閣文庫に『論語講義筆記』という題箋を付された論語の抄物が存する（注１）。本稿では、この抄物資料に対して文体面からの考察を行うものであるが、ひとまずは本稿で取り上げる『論語講義筆記』の概要に関して述べておきたい。但し本資料の詳細を論じた研究は柳田(1998)が現段階では唯一のものと思われるため、多くこの研究に拠ることになる。

まず、本資料の成立時期について述べることとする。一〇巻五冊からなる本資料の奥書には次のような記載がある。

「寛正六載乙酉九月十有四日顓書記於三条六角弘願寺／講了」（第五冊末）

この奥書に従えば、『論語講義筆記』は寛正六(1465)年頃の資料ということになる。

次に、講者希項周顓についてであるが、柳田(1998)ではこの人物に関して、足利衍述氏・玉村竹二氏の研究に柳田氏ご自身の考察を考え合わせた上でのまことに詳細な解説がなされている。希項について氏の解説以上のことを付言することは現段階ではできないため、ここでは柳田氏の記述中から主要箇所を纏めておく。これによると、希項周顓は丹後に生まれ、幼少にして京都に移り住み、「竜阜」（瑞竜山南禅寺）に入った。その後（寛正六年三条六角における論語の講義の後・引用者注）京都を離れ、丹波の徳蔵院に住することになったらしい。

希項がどの地域のことばを話していたかということは、次節で述べるように断定の助動詞「ダ」を考える際に大きく関わってくる。

２．日本語資料としての『論語講義筆記』

それでは、『論語講義筆記』を日本語資料としてどのように捉えれば良いのであろうか。論語の講義が奥書にあるように京都三条六角の寺で行われたのであれば、京都語を反映した資料と考えるのが妥当かと思われる。柳田征司氏もこのように推定しておられるのであるが、そのように仮定すると一見都合の悪い事実が観察される。『論語講義筆記』における断定の助動詞ダの様相がそれである。柳田(1998)は、『論語講義筆記』では断定の助動詞としてヂャとともにダが多用されることを指摘している。これまでは、東国系抄物に多用されていることから、ダは東国語を反映した資料の指標と考えられることもあったが、氏は前述の講者ならびに成立事情から本抄が東国語を反映していると考える余地はなく、「「ダ」が早く成立し、「ヂャ」が遅れて成立したということは理論的に考えても妥当な推定であって、京都においては、この頃、即ち一五世紀の中頃に古い「ダ」から新しい「ヂャ」へと勢力が移っていったのではないか。」と、この資料に見える断定の助動詞ダについて、それがヂャよりも古く京都で行われていた形であることを推定されたのである（注２）。とすると『論語講義筆記』は京幾で成立しながらも断定の助動詞ダを用いた重要な日本語資料ということになる。さらに柳田氏は大塚(1968)で示された諸事象との比較から『論語講義筆記』が、成立の古い『漢書抄』『史記抄』に近く、新しい『毛詩抄』と異なること、また、

・「シム」を用いて「シモ」が見えない点
・二段活用動詞の一段化の例が多く認められる点
・逆接の接続詞「ケレドモ」は、助動詞「マイ」や「ウ」に付いて、「マイケレドモ」「ウケレドモ」の形で早く見えることが指摘されているが、本抄には、「マイケレドモ」のほかに形容詞に付いた例も認められる点

などから『論語講義筆記』は時代の口語をよく反映しており、口語度が高く、日本語史研究資料として極めて価値が高いことも併せて述べておられる。

柳田征司氏の御論考以外にこの資料について論じたものが管見の限り見られないため『論語講義筆記』の資料性についてはより慎重に考えてゆかなければならないが、日本語史を論じる上で多くの示唆を含んだ抄物資料であることは間違いないであろう。

本稿では主に逆接の接続詞を手がかりとして、この『論語講義筆記』を眺めてみたい。

３．逆接の接続詞アレドモ・サレドモ

次の逆接の接続詞を含む文を御覧頂きたい。なお、用例文末の（　　）は、巻数及び丁数を示している。用例文中の下線は私に付したものである。

１）物ヨクシテキセタヲヨイ孝行ト云<u>サレトモ</u>孔子ハヨイ孝行トハ思召サヌソ

（巻１・13オ9）

また『論語講義筆記』では、逆接の接続詞としてサレドモと並んでアレドモという接続詞も用いられている。

２）孔子ハ自然ノ聖也アレトモ人ニ学問ヲサセントテカヤウニ云ソ（巻１・12ｵ1）

このアレドモは土井洋一氏・坂詰力治氏らの調査により、抄物資料に特徴的に見られる接続詞であるとされている（注３）。時代別国語大辞典室町時代編（三省堂）、日本国語大辞典（小学館）などの辞典類を参照してみても、抄物資料からの用例が挙げられるのみである。また『竜州代抄』『大渕和尚再吟』などの洞門抄物の類にもアレドモは見えるようである（注４）。

また、小林千草氏・西本勝博氏はサレドモとアレドモの形式間に意味の相違があることを指摘しておられるが（注５）、『論語講義筆記』に関しては今のところ二つの接続詞間に意味上の差異を見出し得ていない。

本資料は、影印もなく容易に閲覧可能な資料ではないため、まずアレドモとサレドモの用例をいくらか掲げたのち、考察に移ることとする。

【サレドモ】

３）序モ叙モ同サレトモ序ハ総ダヽイ念比ニ云ハ叙也（巻１・1ｵ9）

４）上ハシヤウ下ハキヤウト向ノ字ヲハ心得ルナリサレハ向ト読ムヘシサレトモ日本ニアヤマツテシヤウト読ソ（巻１・1ｳ4）

５）思無邪ハ按理則只聖也サレトモ我ト取テカヘイテ見ナヲス初心ナル者ニハカマイテユカムマシヽト思ハセウトヨク学地ノ者ニヲシユル手タテニ孔子ノ作ラレタヨト見ナヲスソ（巻１・11ｵ13）

６）ナシヨニト云ヘハ周公旦之家ニテ祭ホトニソサレトモ周公旦ハ聖人タホトニ歌タリトモ大事モナイカ（巻２・21ｵ1）

７）悪事ヲ手本ニシタカルホトニ其後ハ動レハヲコタルソサレトモ争ヲハ諸侯ハマイラスルソ（巻２・26ｵ10）

８）居処ハトコニモアランスサレトモ善キ処ヲ択テ居ヨサウナクハ智者テハアルマイソ（巻２・30ｳ14）

９）貧ハ高野カサノ事賤ハイツモ上聖法師テアル者ソ是ヲハ人カニクムソサレトモ貧賤之本道ヲハサルヘカラス（巻２・32ｵ3）

10）世間ハヒロイホトニアリカスルラウ知ラヌサレトモ我ハ未見ソ（巻２・32ｳ10）

11）亦仁者テモナイ物ヲ抑ハ上ヲヽサヘタソサレトモ人ニカハル事ハ学問ヲシテイトハス亦人ニ物ヲ教テ物クサイト思意ハナイ是ハ我身ニアルソ（巻４・25ｳ10）

12）次男ノ仲雍ト二人隠居スル也サレトモ此二人帰ラヌホトニ大王疾ハアツクナルホトニ李歴ニ世ヲ譲ラレタソ（巻４・26ｳ8）

13）人ノ下ノ用ノ字ヲ挙ノ字ノシタニ置タイサレトモ諸本■（虫損）サモナイホトニ不レ及レ改言　ハ不仁ノ心ヲサケステ仁者ノ心ニ至レソ（巻６・29ウ1）

14）稷ハイヤシイ人ナレトモ王ニナラルヽ也サレトモ禹稷ハ大力ラトモ射手トモキコヘヌ也（巻７・7ウ13）

15）我子ヲ世ニ立テタマハレト云ホトニ献公モ領掌眼ニナルナリサレトモ先腹ノ太子シンセイテウジ文公伊吾トテ三人マテアルホトニ料揀モナサニ此リキシンセイヲ呼テ過夜貴方ノ母議ヲ夢ニ見テソウソトブラヘト云ソ（巻７・11ウ7）

16）サルホトニ弟ノヤウヲ見テ是非ニ天下モチウシナワントヨリ／＼思ハルヽソサレトモ云ヘトモキカヌホトニ周文王ニ帰スルソ（巻９・8ウ4）

17）人カ子張ハヨウギカヨイ事ハヨクシカタキ者チヤソサレトモ仁之気カナイソアゲテヲトイテヲシム語ソ（巻10・16オ12）

【アレドモ】

18）顔回モヨク身ヲ行タレトモ位ニハヲラヌソアレトモ時世カクラヤミテ用ヌコソアレ用イハ位ニアランスルモノヲソ禄ヲハ得ネトモ得タト同事ソ（巻１・16ウ7）

19）別々之姓ヲコソ娶ツレアレトモ管仲ハ夸テ平氏藤氏カコトクナルヲ三女ヲ娶ソトケイヘイカ注スルソ（巻２・29オ1）

20）三代ノ器トレモ佛餉ヲ盛テマイラスル処ハ一致也アレトモ前二代ノハ廃テ周ノフキカヲコツタソ（巻３・2オ7）

21）イヤシクトモ只富ウト思ハヽ馬カヘシヲシテモタノシフナランスルソアレトモソレハイヤチヤソ（巻４・20オ8）

22）孔子存生ノ滉々ト七十二ヶ国ヲ遍歴スルヲ人カ見テトコデカ人カ用ンスラントテ御アルキアル御イタハシサヨト皆人カ申タソアレトモ孔子ハ道ヲ行ハンタメニコソ御アルキアレ（巻４・26ウ12）

23）多トハ回ハウマレツキノモノ知ル事カ多ソ平人ハスクナイソ本姓ノ才カ多ソアレトモ寡ニ問ソ（巻４・29ウ3）

24）君子トハ孔子我トハヲセラレマイソト云テ口伝スルソアレトモ私義ソ只孔子ソ（巻５・4オ8）

25）朱晦庵ハ十七節二分ソアレトモ只郷党之内ニアツ事ヲ云ホトニ一ニ見モヨイソ（巻５・8ウ4）

26）回ハ才アリ鯉ハ不才也アレトモカハユイ処ハ同物也（巻６・16ウ3）

27）是ヲモ樊遅カエ心得ヌアレトモ先シツタカヲヽシテ退ク也（巻６・29オ7）

28）圓在中南禅謝語ニ人也トナラルヽヲ人カ咲ソアレトモ咲事ハナイソ（巻７・9オ5）

29）人ハ無用ノ事ヲハ言マシキソアレトモ譬ヘハ大地ヲモ透レ四条ノ橋ヲモ透レ我トヲルアトハ卒都婆一本ノアトホトナラデハトヲラヌソ（巻８・24オ9）

30）子曰十人アラウニ一人ヲトラヘテニクマウニ譬ヘハ十人アルカ九人ハ上酤デ一人カ下酤ナラハ下酤ヲニクムヘキソアレトモ人ニニクマレタ者トテ大事ハナキソ孔子ハソレツラヲモ能知ルソ（巻８・26ウ1）

31）孔子ヲツカハヽ聖人チヤホトニ人カチツト我ヲワルクハ思マシト思テ孔子ノモトヘツカイヲヤツテ呼ソアレトモ孔子無尽返事シテユカヌソ（巻９・1オ6）

32）注庶トハ母カヽハルソアレトモ口伝ソ母ハカハラヌヲ云ソ（巻９・9オ13）

33）魯国ヲ斉カラ動ハトリタカルソアレトモ孔子ノ居テ意見ヲ云ハルヽホトニトラレヌソ（巻９・10オ2）

34）小道トハ異端ソ荘老之道モ一理ハ面白キソアレトモ小乗見識チヤホトニ遠キニハ通セヌソ（巻10・14ウ11）

35）彼君ヲハナニトシテ天ノユルシテ天子位ニ御ヲキアラウソアレトモ御ユルシアラハ打ソウマシ（巻10・20オ12）

以上、サレドモ・アレドモの用例を掲げたが、この二つの逆接の接続詞に関して興味深い点は『論語講義筆記』における各々の接続詞のあらわれ方にある。『論語講義筆記』における両者の用例数を冊毎に分けてみると以下の通りである。

第１冊（巻１・巻２）

サレドモ…１６例（1オ9, 1ウ4, 4オ14, 9オ5, 11オ13, 13オ9, 13ウ6, 17オ12, 21オ1, 22ウ10, 24オ7, 26オ10, 30オ11, 30ウ14, 32オ3, 32ウ10）

アレドモ…　４例（6オ1, 12オ1, 16ウ7, 29オ1）

第２冊（巻３・巻４）

サレドモ…　４例（25ウ10, 26ウ8, 30ウ9, 32オ9）

アレドモ…　４例（2オ7, 20オ8, 26ウ12, 29ウ3）

第３冊（巻５・巻６）

サレドモ…　１例（29ウ1）

アレドモ…　７例（4オ8, 7ウ4, 7ウ9, 8ウ4, 16ウ3, 18ウ8, 29オ7）

第４冊（巻７・巻８）

サレドモ…　３例（5ウ14, 7ウ13, 11ウ7）

アレドモ…　４例（9オ5, 11ウ1, 24オ9, 26ウ1）

第５冊（巻９・巻１０）

サレドモ…　２例（8ウ4, 16オ11）

アレドモ…　７例（1オ6, 3ウ1, 9オ13, 10オ2, 14ウ11, 15ウ7, 20オ12）

総計ではサレドモ・アレドモともに２６例ずつであるが、その分布の様相は表１の如くである。

〈表１〉『論語講義筆記』のサレドモ・アレドモ

	サレドモ	アレドモ
第１冊（巻１・２）	１６	４
第２冊（巻３・４）	４	４
第３冊（巻５・６）	１	７
第４冊（巻７・８）	３	４
第５冊（巻９・10）	２	７
総数	２６	２６

この表から、サレドモは前半部に集中して用いられており、一方アレドモは後半部に多く見えることが看取される。これは単なる偶然の偏りなのであろうか、それとも何か理由があるのであろうか。次節ではこの点に関して考察を加えたい。

４．抄物文体と接続詞

４－１．断定の助動詞の様相

前節で指摘した『論語講義筆記』のサレドモ・アレドモの様相と関連して、柳田征司氏の指摘された断定の助動詞ダの分布のさまが想起される。本資料の断定の助動詞を見ると前半ではダが優勢、後半ではヂャが優勢となっており、ダの分布は本資料の前半部に偏っている（下表２参照）。このことと、逆接の助動詞に関して前半部ではサレドモが優勢、後半部ではアレドモが優勢であることとは関係があるように思われる。

〈表２〉『論語講義筆記』に見える断定の助動詞ダ・ヂャ

（柳田(1998)p244の表を私に纏めた）

	ダ	ヂャ
第１冊（巻１・２）	３５	８
第２冊（巻３・４）	３４	４３
第３冊（巻５・６）	３	６２
第４冊（巻７・８）	０	６３
第５冊（巻９・10）	１	５０
総数	７３	２２６

柳田氏は、断定の助動詞のこのような様相については、講義聞書の文体として、前半

では古いダを多用する文体を採用し、後半では新しいヂャを多用または専用する文体にかえたからではないかと推定された（注６）。アレドモ・サレドモについて言えばダ・ヂャの様相ほどの大きな差異は見られないのであるが、それにしても抄物独特の接続詞とされるアレドモが後半部に集中して見られるのは、後半部においてより抄物文体「らしさ」を出そうとしたためであると考えられる。

アレドモが抄物資料にしか見られない特殊な接続詞である以上、サレドモとの違いは「抄物文体」という文体面から捉えるべき問題なのではないかと考える。仮にアレドモとサレドモが意味を異にする接続詞であるならば、キリシタン資料・狂言資料などの同時期の他の資料にはなぜアレドモが見られないのであろうか。

土井洋一氏が、

「抄物を文体の面から見る時、文末語と並んで特徴的なものに、接続語としての「程ニ・サウシテ・アレドモ」の頻出が挙げられる。そしてこれは聞書に著しい。」（土井(1960)p34）と述べられ、また坂詰力治氏が、

「その（アレドモの・引用者注）意味は「サアレドモ」「サウアレドモ」と同じであるが、多くの接続詞が指示語を構成要素としているのに対して、この「アレドモ」は指示語をとらないで独立している。こうした指示語をとらない接続詞は、主に口語性の強い抄物に多く使われているようであるが、抄物にあって、なぜ指示語を構成要素して（ママ）、当然複合化すると思われるものが、指示語をとらず、独立し使われることが多いのかを考えることは、抄物の接続詞の特徴を明らかにするうえに重要であると思われる。なお、伊曽保物語、日葡辞書や狂言などに「アレドモ」は見られないようである。」（坂詰(1987)p22）と述べておられるように、接続詞アレドモは抄物文体「らしさ」を示す言語上の一指標であるように思う。

これは同時期の関西系抄物資料にはあまり見られない断定の助動詞ダが前半部にしか見えないことと考え合わせると、本抄の筆録に当たり徐々に講義聞書文体としての統一が図られたことを示しているものと思われる。

４－２．サルホドニ・アルホドニ

サレドモとアレドモの形態上の違いは指示語サを有しているかどうかという点にある。坂詰(1987)で述べられているように、抄物には指示語を構成要素としない接続詞が多く見出される。小林千草氏・西本勝博氏の御論考のような、接続詞間の意味的相違を探る試みも当然なされるべきかとは思うが、ここでは問題を文体面に絞って考えたい。

接続詞サルホドニは「さて」といった意味の発語としての用法のほかに、抄物において多く理由を表す用法で用いられているとの指摘が坂詰力治にある（注７）。『論語講義筆記』においても、以下のように原因・理由を表す接続詞として用いられている例が多く見られる。

36）古人ヲツカウニ力ツヨイ者モ有ヨハイ者モアルソ力ノ多少ニヨツテ軽重ノ者ヲモタスルソサルホトニ分サイニヨツテモツホトニ辛労ハセヌソ（巻２・26オ4）

しかしこれも逆接の接続詞アレドモと同様に、指示語を構成要素に持たないアルホドニが、原因・理由を表す接続詞として使用されている。

37）僖公ノ兄ヨリモ位カ高ソアルホトニ弟ナレトモ僖公ノ上ニヲルソ（巻２・24オ2）

このアルホドニという接続詞は、キリシタン資料・狂言資料には見当たらないようである。のみならず先行研究が取り上げた、抄物資料に見られるとされる接続詞中にも見られない。今後の調査に俟たねばならないが、あるいは本資料独特の接続詞なのかも知れない。

そしてやはり、指示語を構成要素として持たないアルホドニは、アレドモと同じく後半部に集中して見られるのである（下表３参照）。

〈表３〉『論語講義筆記』のサルホドニ・アルホドニ

	サルホドニ	アルホドニ
第１冊（巻１・２）	１３	２
第２冊（巻３・４）	１７	２
第３冊（巻５・６）	８	１
第４冊（巻７・８）	１０	８
第５冊（巻９・10）	１２	７
総数	６０	２０

つまり、指示語を構成要素として持たない接続詞であるアルホドニ及びアレドモは『論語講義筆記』の後半部において多用されていることになる。そしてこれらの接続詞の類は抄物文体に特徴的なものであり、これらを多用することは抄物文体「らしさ」を高めることにつながったものと思われる。

５．まとめ

本稿では、抄物資料に特徴的に見られる逆接の接続詞アレドモが『論語講義筆記』にも見えることを指摘し、さらにはこのアレドモが本資料後半部に偏ってみられることを述べた。これは、金田弘氏・小林千草氏・坂詰力治氏らが指摘しておられるように、抄物の文体と接続詞とが密接に関わっていることを示している。

『論語講義筆記』はそのような抄物としての文体を整えようとする様子を窺うことのできる貴重な資料と言えよう。

（注１）図書請求番号 和書／第１０門／第５２號／１。なお、柳田(1998)は、「この書名（論語講義筆記・引用者注）は新装題箋に書かれたもので、その命名も新しいものである」（p233）とするが、本稿でも氏の研究に倣って『論語講義筆記』という書名を用いることとする。

（注２）京都の劣勢語として「ダ」が存したという考えは、大塚光信氏の以下の記述等を参照。

「一般にヂヤはデアルの下略であるデアからきたといわれている。普通ことばの音声上の変化は、いくつかの可能性のうち、なんらかのある事情によって、次第にただ一つの形に固定されるという方向をとる。デアがヂヤに変化する過程において、一方にダがあったとすることも可能だと思う。それが、ヂヤが優勢になるにつれ、－あるいは最初からヂヤが圧倒的に優勢で、ダはそういう形も可能的だったという程度にすぎなかったかもしれないが－ヂヤに統一され、ダは消滅したというのではないだろうか。（ハ）（四部録抄）の成立はわからないが、（イ）（首楞厳経抄）（ロ）（襟帯集）が抄物として初期のものに属することも、先述の考えに有利のように思われる。つまり、私は、すくなくとも（イ）（ロ）にみえるダについて、筆記者・転写者に関東系の人々の介在を考えようとするより、ダそれ自体京都語の劣勢語であったとする方がより合理的な考えだと思っている。」

（大塚光信(1996)「ダとある種の抄物」『抄物きりしたん資料私注』p583）

（注３）土井(1960)・坂詰(1987)参照。

（注４）金田(1976)参照。

（注５）両者の見解は次の通りである。本稿では考察対象外としたが、意味面からのこのような考察は今後考えてゆくべき問題であろう。

「（天理図書館蔵『神書聞塵』における・引用者注）アレドモの前件末（ただし、ゾの上部要素。なお、前件は全て平叙文）を調べるに、動詞「合フ」一例以外は、

動詞アル（１）　形容詞ナイ〔補助的用法を含む〕（２）　副詞カウ（２）　形容動詞語幹（１）名詞（２）

となっており、前件で述べられた状態の存在をそのまま認めつつ、前件といささか齟齬する後件の事態（平叙文）を語り継いでいこうとする姿勢が顕著に出ている。」（小林(1992)p549）

「アレドモとサレドモの意味上の差は、前者に対して後者の方が、前件・後件をストレートに逆接の関係で捉えていることにある。前件末の語も、アレドモのような傾向性がなく多種多様である。」

（小林(1992)p550）

「「サレドモ」は前件の事実内容を承ける逆接であり、一方、「アレドモ」は前件の発話を承ける逆接」（西本(1998)p56）

（注６）柳田(1998)pp245-246。

（注７）坂詰(1987)p21。

【引用・参考文献】

足利衍述(1932)『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会

阿部隆一(1963･1964)「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考」（上)(下)『斯道文庫論集』2・3

大塚光信(1968)「詩学大成抄とことば」『国語国文』1968･9
――――(1996)「ダとある種の抄物」『抄物きりしたん資料私注』(清文堂) 所収
金田　弘(1976)「洞門抄物と接続詞」『洞門抄物と国語研究』(桜楓社)所収
小林千草(1981)「抄物の接続詞－その有する性格－」『国語と国文学』58-5
――――(1992)「景徐聞書の接続詞」『日本書紀抄の国語学的研究』(清文堂) 所収
坂詰力治(1987)「抄物の接続詞について」『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』(武蔵野書院) 所収
玉村竹二(1983)『五山禅僧伝記集成』講談社
土井洋一(1960)「抄物の手控と聞書－口語資料としての性格－」『国文学攷』24
西本勝博(1998)「抄物にみられる接続詞」『岡大国文論稿』26
柳田征司(1998)「希頊周顓講『論語講義筆記』と断定の助動詞「ダ」」『室町時代語資料としての抄物の研究』(武蔵野書院) 所収

〔付記〕前田育徳会尊経閣文庫からは『論語講義筆記』の本文引用許可を頂いた。記して感謝申し上げます。なお、本稿は平成十五年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（まつお　ひろのり・日本学術振興会特別研究員）